
結婚編～僕のノルウェイの森

村上サガン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結婚編〜僕のノルウェイの森

【Nコード】

N6518U

【作者名】

村上サガン

【あらすじ】

ミドリとの婚約解消して六本木族そして結婚編
シリーズ第5章

ノリコ(2011-10-30)

30歳になっていた。

会社後輩バットは結婚して、社内では独身は僕だけとなった。

突撃隊や同級生も結婚していた。

ミドリとの結婚破談で、夢だった六本木に暮らして、

素敵な女性に知り合ったがエンがなかった。

半年しかもたない交際が多かった。

妹分のミサコは結婚していつのまにかフェードアウトしていた。

歴史は繰り返す。

京子と似た19歳のノリコと知り合い、慎重に交際した。

銚子で釣り船をしている両親に挨拶に行ったことがある。

ノリコは両親が残した王子の一軒屋に住んでいた。

同棲したのがいけなかったのだろうか。

早くけじめをつけて結婚しておくべきだった。

なぜか、そのけじめをつけるまで行かない自分がいた。

暮らし出すと釣った魚にはエサを与えなくなってしまう。

ある日間違った関係になったと告白された。

単なる会の主要メンバーだったただけだが。

六本木族が多忙な時期だった。

ノリコをかまわないことがあって、

主要メンバーらとの外泊を許してしまったのだ。

夜明けまで迫られたそうだ。

ノリコを許そうとも思ったが、結婚に踏み切れない何かがあって

このままにノリコとは友人関係になった。

僕の影響だろうか。

ノリコはパーティー屋をめざして、ソーシャルクラブの会社に転職した。

ルックスがいいので会社の社長はクラブの看板娘にした。

ノリコ目当てに男性会員が増えていった。

僕は会社のパーティー動員を手伝うようになった。

決意

毎日、祭りの場所へ帰宅する。

仕事が終わると六本木交差点にあるアマンドの前を通る。

これから踊りに行ったり、飲みに行く連中といっしょに歩く、

祭りのように人であふれている。

スーパーに寄って夕食の材料を買い、帰宅して自炊する。

踊りたくなった時は、その頃できたばかりの「マハラジャ」まで歩いて行けた。

ロアビル近くに住んでいたので

夜は窓をしめているが、外は夜を知らない街で、

夜明けまで騒いでいる声が聞こえた。

六本木族も3年間は会員も増えて多忙だったが、

副部長が独立して新たな会を作って会員の移籍などがあり、

会員も少なくなった。

再度、会を守り立てる意欲もなくなった。

六本木族という会を作って、

あこがれだった「マジック」を貸しきるパーティーが頂点だった。

完全燃焼してしまった。

登山と同じで一度登ってしまうと、再び頂上をめざしたいとは思えなかった。

会で素敵な女性と知り合う機会は多かったが、遊ばれていた。

悪く言えばつまみ食いされていたことになる。

会長をしているので遊び人のレッテルを張られていた。

交際していた22歳のイクコが沖縄に帰った。

沖縄の人は沖縄が恋しくなつて帰る人が多い。

フサエもそうだったが、沖縄女性の明るく隠し事のない

自由奔放の流れにまかせていた。

複数の男性とつきあう、束縛されたくないと言っていた。

イクコとの交際が切れた時に決心した。

一人になることを恐れるな、

結婚したいと思う女性にめぐり逢うまでは

妥協するな、ルーズに女性と深い関係にならないと決めた。

ミドリのようなケースにはならない。

女性のカンはするどいから、他に女性がいると雰囲気でわかるものだ。

一人でいることが大切だ。

そう言っても気まぐれに泊まりに来る女性がいた。

連絡先も既婚かどうかさえ知らない。

僕の部屋を別宅か一夜の宿的に利用する。

マナーはよく、あらかじめ電話で確認してくる。

その中のひとりに結婚してもいいなと思う23歳のトクコがいた。

カンだと同棲している感じだった。

この際はっきりしてみようと思い「結婚しようか」と言った。

「それなら、それできっちり交際しよう」と彼女が言った。

数ヶ月交際したが、迷っている、

彼氏とは3年も同棲していて、つながりが断ち切れない。

「たまに来るのがいいのよ」とトクコは言った。

青山移住

夢の中に直子がでてきた。

「ねえ。私のこと、やはり書くの?」

「ああ、覚悟してくれよ。」

書くことにしたから」

「知らないから。」

お願い、やめてと言っても、

どうせ、書くんでしょ。

あなたは頑固ものだから」

直子はそう言つと消えていった。

ヤスコ、マリコのような

人目でフリーズするような女性と知り合いたい。

駄目なら結婚はあきらめる。

そう思つて一年が経過していた。

仕事は忙しく、六本木にいる価値があるか疑問に思うようになった。

永住したいと思う青山への移住を考えるようになっていた。

ヒデキは東横線が好きで代官山に住んでいた。

東京で東横線ほど、センスのいい線はなく青山の次の候補だった。

冬は、スキーが上達したくて、ひとりで湯沢に通っていた。

3月7日のことだ。

上野から朝一番の新幹線の自由席に乗った。

混んでいて、幸運にも空いていた席がひとつあり、

その席に座った。

直子との出会い

新幹線で、ひとつだけ空いていた席に座った。

隣の窓側には女性が。

横顔すらみようとしなかった。

無意味に女性に声をかけたりすることは控えている、

スティックになってしまった自分がいる。

出会った流れで、タイプではない女性と交際していると、

そんな時に限って、タイプの女性と出遭う。

その繰り返しだ。

いつか、めぐり逢えると信じていた。

タイプの女性と出会った時に、

交際している女性がいらないこと、

ひとりであることほど強いものはない。

列車が出発しても、沈黙が続いた。

女性の顔を見ることさえしなかった。

しばらくして車内販売が来たので、コーヒーを注文した。

隣の女性もコーヒーを注文した。

コーヒーを受け取る時に顔を初めて見た。

素敵な横顔をしていた。

自然に声がでた。

「朝はコーヒーがないと落ち着かないんですよね」

「朝のコーヒーは欠かせませんね」と話しに応じてくれた。

世間話がはじまった。

話してわかったことは、名前は直子、僕より一歳下、

ピアノの講師をしていて、

オーケストラでバイオリンを演奏している。

オケの仲間が昨日から苗場の宿に泊まっていて、

一日遅れて合流する。

下車する駅が同じ湯沢駅だった。

駅に着くと、

湯沢駅の構内を二人でスキー道具を持って歩いた。

見えてくるのは、

長身のやせ型で、脚は日本人ばなれして長かった。

苗場行きのバスまで時間があると言うので、

駅前の喫茶店に入ってコーヒーを注文した。

喫茶店に座って正面から直子を見ると、僕のタイプを超えていた。

イングリッドバーグマンよりオードリーヘップバーンに似ていた。

顔だけでなく、スタイルも雰囲気も。

「いつしよに苗場へ行きますか」

僕が行ってもかまわないと言った。

苗場にはオケの仲間が大勢で来ていて、男性もいるらしい。

そこへ行った場面を想像した。

電車で会ったばかりの僕が行って、

プラスになることは、なにもない。

むしろマイナスなるばかりだ。

美人を追いかけて、やってきた間抜けな男でしかない。

僕は行かなかった。

あまりに美人すぎる、交際できるわけがないと思った。

縁があれば縁があるだろう。

予定していた湯沢スキー場へ行くことにして、

別れる際に電話番号を聞くと、

すんなり教えてくれた。

初デート

東京に戻って電話するが、なかなか通じない。

エンがないんだと、あきらめ気味だったある日、

電話したら、運よく、つながった。

「こんばんわ」

「あゝ、 トオルさん」

声を聞いただけで、すぐに僕の名前を告げた。

よく覚えていたものだ。

同時にデートに誘えると確信した。

3月初旬に出遭って、初デートは3月下旬だった。

映画を観ようと銀座で待ち合わせ、

定番の待ち合わせ場所、ソニープラザ前だ。

映画館に行ったのだけと行列待ちなので、

映画を断念して喫茶店に入った。

直子は濃紺に白い水玉のワンピース、

やせているのでウエストがルーズな仕立てがサマになっている。

映画「ローマの休日」のオードリーヘップバーンが

スクリーンから飛び出してきたような感じだった。

「仕事、何やっているんですか」

「コンピュータの仕事です」

「プログラマー？」

「プログラマーは卒業しました」

「じゃ、システムエンジニア」

「それも、一応卒業したような・・・」

「じゃ、何？」

「システムアナリスト」

「何、それ？」

「システムを分析する仕事です。」

ある事務作業の仕事を分析してコンピュータ化したら、

どんなメリットがあるか、

ユーザーや経理部門やトップに提案する。

システムのグランドデザインを設計して、

開発に必要なシステムエンジニア、プログラマーは何名必要とか、
いろいろ立案するんです。

開発がスタートしたらプロジェクトのお守りをする」

「わあゝ 難しそう」

「ユーザーはコンピュータに素人だから

わかりやすく説明しなければ理解されない。

誤解されることも多い。

コンピュータが勝手にやってくれると思っている。

ひとつひとつ編み物のようにプログラムで

縫い上げているなんて思われない。

政治と同じで うまくいってあたりまえ 必ずバグがでる。

するとクレームの嵐になる」

直子には理解できないことが飛び交って、

話しについていけないという顔になってきた。

「まあ、達成感でない　いつも不完全燃焼で終わる。

他の人から何に悩んでいるかも理解されない。

頭だけが疲労する、つらい肉体頭脳労働なんですよ。

ところで、直子さんの仕事はどうですか？

音楽の教師なんですよ？」

「バイオリンだけでは生徒が少ないので、ピアノを教えているの。

そっちの方が断然多い」

「バイオリン、いつから始めたんですか？」

「幼稚園から。

小学校から国立音大の付属に通って、

小学校からオーケストラに入ってバイオリン演奏、ずっと音楽馬鹿してる」

「よく挫折しなかったですね」

「一度だけ小学5年の時に、なんだか嫌になって、オケの演奏旅行行かないと言い出した」

「それで？」

「親は行けと言ったかなと思ったら、完全に無視されて放っておかれたの。」

親の勝ちね。

しばらく音楽から遠ざかっていると、また演奏したくなったの」

「なかなか理解ある親ですね。」

ウチの母親もそうだったらよかった」

「そうだったら、って？」

「母は僕をピアニストにたく、幼稚園の時にあの手この手で教室に通わせるんです。」

でも反抗して2年程度でやめました」

「へえー ピアノねえ」

「今、後悔していますよ。」

中学の頃からバンド組みだして

最初はギターだったんですが、ピアノにあこがれるようになって、幼稚園の時にピアノを投げださなければ良かったと。

それで高校時代は音楽部にあるピアノで独学練習していたんです」

「バンドねえ。

高校時代にバンド組んで素人コンテストで優勝したことある。

まったくラッキーだったわ」

「へえ」。

僕は大学に入ってナレオというロックバンドクラブに入部したんです」

「ナレオ？ 早稲田のナレオ？、聞き覚えがある。

TBSテレビ番組の銀座ナウに出てなかった？」

「ああ、先輩らが、その番組の素人コンテストのバック演奏をしていて、

僕ら一年はバンドボーイで、テレビスタジオ入りしてた」

「その素人コンテストで優勝したの。

高校三年の時だった」

「ということは、僕が、ひとつ年齢が上だから、

スタジオでニアミスしているかもしれないんだ」

「へえ」 そんなことがあるのね。

今、バンド、どうしているの？」

「大学の先輩のロックバンドに誘われて

、定期的にスタジオを借りて演奏しています。

バンドのメンバーが広告代理店に勤めているので

最近、テレビのコマーシャルソングを録音したんですよ」

「え！ スゴイ」

「とんでもない、地方のテレビ局で曲が流れただけですよ」

「歌なの？」

「バンマスが作曲した結婚式場用のオリジナルソングです。

一応僕が歌とピアノ、担当ですけどね」

「聞きたい」

「今度、そのテープ、持ってきますよ」

花見の頃

1回目のデートのあとだった。

電話で話していると、直子が尋ねた。

「なぜ 六本木に住んでいるの？」

「田舎者なんですよ。」

六本木に行ったとき、六本木に住みたいと思って、

それが夢になったんです」

「六本木の前は、どこに住んでいたの？」

「信濃町」

「信濃町って、四谷の次の駅？」

「慶応大学病院の隣に住んでました」

「え！ その慶應大学病院で生まれたの。」

近くに花屋なかった。そこは親戚」

「あゝあった、隣に」

「ふうん。不思議ね」

「直子さんの誕生地に住んでいて、花屋でニアミスしていたかも」

「そんなことあるのね」

「例のテープだけど、いつ持っていこうか？」

「日曜はどう？。その日は上野でオケの仲間と花見しているから、ちよつとなら抜け出せる」

4月、桜が開花している頃だった。

上野の西郷隆盛の銅像の前になると、

直子が肩にバイオリンケースをしょってやってきた。

「花見いいの？」

「ちよつとなら、いいの」

テープを渡す。

「ありがとう。楽しみ」

バイオリンケースを見ながら、尋ねた。

「花見で演奏するんだ。クラシック？」

「まさか。歌謡曲よ」

ここでクラシックだと言われるとなにか近寄りがたい気がした。歌謡曲と聞いて、さらに親しみを感じた。

「カラオケなんか、するんだ」

「うん、『つぐない』が愛唱歌」

「テレサ・テンか。ちょっと暗いね」

「歌詞が いい のよ」

そろそろ時間が経ったと思って
「じゃ、またね」

すると、直子が言った。

「ねえ、今度、六本木のカフェバーを案内してくれない？」

「ああ、いいよ。インクスティックでも行こうか」

「安全地帯の出演したバーね。楽しみ」

求婚

夢の中に、直子がでてきた。

「ねえ インクスティックのあのことを、どう書いたの？」

「読み上げるよ。」

僕らは六本木のカフェバーに初めて飲みに行った。

直子は酒には強いクセに、酔ってしまったのだろうか？

それとも演技なのか、

涙目になって『信じていいのね』、と直子がからんできた。

僕が結婚しようと言ったからだ。

単刀直入にプロポーズした。

その日は部屋に泊まった」

「だから、いやなのよ。恥ずかしい」

「今思うと もう年齢的に結婚しなくてはいけなくて、お見合いした相手がいたんだろう。そんな時に、僕と知り合った」

「そうかもしれない。」

私、トオルに言ったわね。

今からお見合い相手に会って、断つてくると。

でも、なぜ、そう思っただの？」

「だって、直子のような美人が僕に積極的になるわけがないさ」

「わたしは、自分から好きになるタイプだと思うの。」

あのテープがいけないかもね。

ずっと聴いているうちに、歌が頭でグルグルまわって

この人と結婚するかもと思った」

「そうだよな。」

あのテープの歌詞は『結婚しよう』とか『今日は結婚式』なんて
結婚式場のCMソングだからね。

本当は、そんなつもりで聞かせたのではないのだが。

ただ、僕らのバンドの曲を聞いて欲しかっただけなんだ」

「トオルの声って沢田研二に似ている、そして不思議な人よ。

トオルのような人に、これまで会ったことがない」

「ああ、よく言われる、変な男、変人だと。」

母にも言われているよ。

あんだ、変わっているって」

「ヴィトンが好きだし、着ている服も見たことのない独特のセンス
よね。」

「JUNのシャツ、あれ好きよ」

「チャコールグレイのタペストリー柄のシャツか。」

結局、直子が、あのシャツはずっと着てしまっただよね」

「着たいと思うような色柄だからよ」

「こんな変な男だけど、僕は直子に首ったけになった。」

結婚したいと思ったんだ」

結婚詐欺師

確率からすると文句のないベストカップルだ。

僕の血液型はO型で土星人、直子はA型金星人、蟹座同士。

六星占術で土星人と金星人は結婚と仕事、ともに最高の相性。

土星人は白黒のけじめをはっきりさせないと気がすまない、中途半端、ルーズといったことが大嫌い。

人付き合いが大の苦手。

そのかわり孤独に強く、だれの干渉も許さない“自分の世界”を持っている。

一匹狼的で、周囲の評価に無頓着。

金星人とだけ、相性がいい。

すべて、僕にあたっていた。

金星人は結婚したあと家庭に入るより、仕事を続けるタイプ。

休息ということを知らない金星人は、忙しい状態でないと落ち着かないところがある。

外面のよさから、金星人ほど営業に向いている星人はないといっている。

社交性があり、どんな人とも合わせることができる。

もちまえの個性的なファッション感覚、すぐれた美的センスから、ファッション関係や芸術分野で成功をおさめることができる。

行動的で束縛を嫌う金星人は、家庭に落ち着くことをあまり好まない。

結婚しても、お互いに干渉し合わない関係を望み、女性の場合、晩婚の傾向にある。

直子はその通りの女性だった。

血液型では男性O型と女性A型では、

O型の野性的で大胆なところにA型は魅力を感じるが、

O型の独断独走にA型女性は嫌気を感じるそうだ。

星座では蟹座同士は基本的恋愛観が一致して、とてもいい相性だと言う。

O型の独断専行、大胆なる結婚への猛アタックがはじまった。

「6月に結婚しよう」と僕は言った。

直子は時期早々と悩んでいた。

僕はまったく迷うことはなかった。

すべてを直子との結婚にかけて、集中した。

出遭って1カ月が過ぎたばかりだが、長い春になってはいけないうと思った。

「お互い思ったときに、さっと結婚しよう。

結婚とは賭けのようなものだ。

結婚はしてもしなくても後悔するものだ。

思いつきり飛び込む勇気が必要だ」 と、主張した。

直子は答えた。

「清水の舞台から飛び降りるようなものね。

友人に相談したのよ」

「なんて言われた？」

「結婚詐欺師だと・・・・・・・・」

僕は納得した。

六本木に住んで、外資系に勤めて、バンドをやっていて、

知り合って一ヶ月で結婚を急ぐ、

結婚詐欺師と言われても仕方がない。

影千代

猫が直子の結婚を決心させた。

巣鴨駅で待ち合わせして、直子の両親に挨拶に行くと、両親は猫好きで二匹も飼っていた。

挨拶を終えると、スープの冷めない距離にある、直子の住んでいる三階建てのマンションへ移動した。

二階にある直子の部屋は2DKで、かたづいていた。

和食が好きな僕に、肉じゃがなどを作ってくれた。

その日は泊まると、朝方のことだった。

「影千代がわかってる」と耳元でつぶやいて、涙する直子がいた。

布団で寝ている僕と直子の足元の真ん中に影千代が入ってきたのだ。

影千代とは直子が飼っていた猫の名前だ。

名前からするとオスだが、メスだ。

黒と白のツートンカラーで黒いマスクをしていた。

名前は漫画「忍者ハットリくん」に登場する猫に

似ているので、そこからとったそうだ。

変わった猫で、直子以外に誰にも絶対なつかないそうだ。

猫好きの両親や下の二人の弟にも、なつかない、近寄りもしない。

影千代に近づこうものなら、さっと逃げていく。

なんとか捕まえても「フー」と威嚇したり、

爪を立てて激しく抵抗する。

直子の部屋に入った時、影千代は外出中だった。

昼間はここかの軒下などに潜んでいる。

直子が在宅の時は、部屋にいるが、

他人が来ると逃げ出してしまふ。

人間嫌いで、夜になってヒトケがなくなると姿をあらわす。

直子が言った。

「ビックリしたの。

どんな人にも、なつかなかった猫よ。

まだ生まれたばかりの捨て猫だった時に拾ってきたの。

仕事で昼間は相手できないから、ずっと部屋に閉じ込めていて、他の人に接することもなく、夜帰ってきた時だけ、可愛がった。

そんな育て方をしたので、変な猫になった。

不思議よね、影千代は、あれからトオルがいても逃げないのよね。

トオルと暮らすことを覚悟しているみたい」

直子の猫だから、こちらから積極的に可愛がりにいくだろう。

でも僕には、僕独特のアプローチがある。

最初に足元に來たからといって、僕になついたわけではない。

影千代は、常に距離をおいて僕の前にいた。

逃げ出したり隠れることだけはしなかった。

影千代から、近づいてくるまで何もしなかった。

僕は犬を飼った経験はあるが、猫を飼った経験はなかった。

犬のよさもわかるが、直子と出会い、女性と同じ気まぐれな、猫も好きになってしまった。

麻布南部坂教会

6月16日に結婚する。

式場をどこにするか、二ヶ月を切っていた。

僕には理想の結婚式があった。

麻布南部坂教会で式をあげて、帝国ホテルで披露宴。

大学2年の時だった。

学費値上げに反対して全学ストライキ突入。

革マル派が強かった時代で、

後期試験が教場外試験となった。

2月17日に大学から教場外試験の内容が届いた。

すべてレポート提出ということなり、その内容が送られたのだ。

14科目、各々数十枚にまとめる論文形式で、

一部を除いて3月6日締め切りだった。

レポートに必要な資料を探すために一番いい図書館を探した。

日本で一番蔵書数の多い国会図書館は資料取り出しが、

いちいち申し込み閲覧システムなので効率が悪い。

麻生の有栖川宮記念公園にある都立中央図書館をみつけた。

国会図書館に次ぐ蔵書量で、5階建ての近代的建造物、食堂もある。ここに20時まで籠ってレポートを書くことにした。

当時信濃町に住んでいて、バスで20分もかからず、便利だった。

図書館に通っている時に何度も、映画に出てくるような結婚式を見た。

公園から見えるドイツ大使館の隣にある南部坂教会での挙式だ。

微笑む二人へのライスシャワーは幸福の絶頂シーンが目についている。

小林緑と結婚することになって、

南部坂教会と帝国ホテルを予約した。

緑が結納の前に結婚を破談にしてしまった。

直子がでてきた。

「そんなことがあったの？ 隠していたのね」

「ああ、そんなこと、話せないだろう」

ナオだつて、影千代は元カレの忘れ形見なんだろう」

「言つたけ？」

「つきあつて、随分経つた時に、モメたことがあつたね。

その時にポツリと言つたぞ。

思いもかけない話しに、びっくりしたよ」

「お互い様ね。

しかし私とトオルに共通しているのは、

派手好きなところね」

「緑との破談で、多くのことを学んだよ。

緑が一方的に好きになり、それを受け入れたんだけど。

傷ついた分、人の痛みがわかるようになった。

長い春は、よくないこと。

優しさとは何か、あらためて学んだ。

別れた原因は、片一方だけが悪いということはない。

男女どちらにも欠点があつたんだ。

僕はそう思うよ
「

変に優しすぎるところが、欠点かもね」

ノルウェイの森で結婚式

教会で思い出したことがある。

東京に来てはじめて住んだ目白で聞いた鐘だ。

そう、小説「ノルウェイの森」の舞台にある教会。

正式には目白東京カテドラル聖マリア大聖堂と言って、

東京の教会の総本山、

明治時代に建てられた日本最初の聖堂だった。

1945年の東京大空襲で焼失してしまい、

現在の約40メートルの高さの大聖堂は

建築家丹下健三の設計で、1964年に落成し、

フランスのルルドの泉の洞窟の岩場も再現されている。

18歳の時に大聖堂の鐘を聞きながら寝起きしていた。

僕はカトリック教徒ではないが、

なぜか結婚式は教会しか頭になかった。

映画好きの影響と、幼稚園がカトリック教会だったからだろう。

教会に申し込みにいくと、

仮の教徒になれば、結婚式を挙げられると言う。

毎週、講習会に参加するのが条件だった。

直子と二人で通うと、講習の内容は夫婦生活でのカトリックの教えや、

結婚後の人生の入門みたいなものだった。

披露宴は

目白通りを挟んだ、カテドラル教会の斜向かいの「椿山荘」に決めた。

小説「ノルウェイの森」で登場するホタルは「椿山荘」から飛来してくる。

直子が言った。

「目白にホタルがいるの？」

「うむ、何度も飛んでいるのを見たことがある。

椿山荘で放し飼いされたホタルが迷子になるんだろう。

夜アルバイトが終わって帰る時に、胸突坂を通る、街灯がなく、暗闇で怖かった。

神田川を渡って 右に松尾芭蕉庵があつて、そこからノルウェイの森にはいる急坂なんだけど、名前の通りに胸を突く坂なんだ。

そこへ道案内するように蛍がでてくるんだ。

右は椿山荘の塀が続き、左は永青文庫や妖しげな洋館がある。

小説では、主人公の下宿先和敬塾にも飛んできた。

椿山荘と和敬塾はホタルが飛んでくる程に近い場所にあるんだ」

キャンティーで結納（2011・10・30）

知り合って二ヶ月経った5月、

六本木飯倉にあるキャンティー本店の

二階を貸し切って結納を行った。

店の洋一さんが鯛一尾を出してくれた。

淡いピンク色の和服を着た直子をはじめてみた。

思えばキャンティーとの出会いもノルウェイの森だった。

洋一さんの弟と下宿先でいつしよにならなかったら

キャンティーに通わなかっただろうし、

六本木に住みたいとは思わなかっただろう。

両親は直子に女優というあだ名をつけてしまった。

友人に会わせるたびに、同じことを言った。

新居は六本木を離れて青山にしようと思ったが、

バンドの先輩を手本にすると、

新居は妻の実家に近い、スーパの冷めない距離がいらしい。

直子のことを考えて南大塚に新居を決めた。

最寄り駅は大塚駅で、直子の実家とはスーパまではいらないが、
シチュウが冷めない距離だった。

式場と披露宴予約、結納が終わり、
新居決定、ハナムーンも予約した。

ひとつひとつ、直子に了解を得ながら進めた。
あとは、直子のマリッジブルーだけが心配だった。

破談されても後悔しない、

その時は、いさぎよく去る覚悟だけは、できていた。

（終わり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6518u/>

結婚編～僕のノルウェイの森

2011年11月15日12時39分発行